ドイツさんと私

タナカハナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ドイツさんと私

【Ｎコード】
Ｎ０６４９Ｚ

【作者名】
タナカハナ

【あらすじ】
見た目小学生のＯＬ鈴木麦子が家に帰ると、そこにはなぜかゴリラ――のようなドイツ人。どこかすっとぼけた日本語を話すドイツ人と、文字通りの意味で振り回される麦子との恋愛とビールと何かの日々。●実際の人物とはまったく関係ありません　●ドイツ語は適当です　●主人公編四話完結。現在ドイツ人編連載中

玄関にゴリラ

ある日、家に帰るとゴリラがいた。
しかも、うちの玄関ポーチ。仕事柄目を使いすぎたのかな、と思って擦ってみても、そのゴリラは一向に消えない。消えないどころか、すごい存在感を発している。
目算で身長二メートル弱。清潔感のある白いシャツからちらりと見える腕には、むきむきの筋肉。
――ん？　白いシャツ？
どうしてゴリラがシャツなんか着ちゃってるんだろう、と近くに寄ってみる。すると、私のその気配に気がついたのか、それはくるりと振り返った。

「コンバンハ！」

しゃ、しゃべったあああ！
どこぞで目にしたＣＭかくや、というテンションで、私は口を開いたそれを見上げる。
ポーチに取り付けられた暖色の灯りの下、きらきらと光る金色の髪。私を見詰める瞳は綺麗な青色。
つまり、ゴリラはゴリラではなく、ただのでかい外人だったのだ。

「こ、こんばん、は？」

だがしかし、なぜこの巨大な外国人がうちの前に居座っているのか、という疑問はまだ解消されていない。
ものすごく威圧感のあるその顔を見上げながら、とりあえず私は

当たり障りない挨拶を返す。そして、じりじりと警戒心を露わにしながら玄関へと歩み寄った。うお、近くで見るとさらに巨大！

「隣に、来ました。オミヤゲ？」

なんで最後に疑問型、と心の中で軽く突っ込みつつ、外人が差し出すそれに視線を落とすと。

なんということでしょう！

どこかの番組ナレーションのような感想が、頭の中を駆けめぐった。外人が手にしているのは、あきらかにワイン。しかも、白。そしてドイツ産。

一瞬にしてそれだけの情報を読みとった私は、自然とにやける顔を直しつつ、差し出されたそれをうやうやしい仕草で受け取る。

「わざわざご丁寧に、ありがとうございます」

よそ行きの顔で笑ってみせると、なぜか外人はその白い頬をうっすらと染めた。顔とがたいに似合わず、照れ屋らしい。

にしても、でかい。近くで見れば見るほど、遠近感が狂う。

鍛え上げられた体躯はよけいなものの一切ついていない筋肉質。それはボディビルダーのような不自然なものではなく、どちらかといえば軍人さんのような、持久力ありますって感じの付き方。私の好みだ。

その上に乗っかっている顔も、いかにも外国人ですっていう彫りの深さ。整ってはいるのだけれど、いかつさが全面に出ているため、これ絶対子供泣くよねっていう仕上がり。もったいないなあ。

薄い金色の髪は短く整えられ、青い瞳が少し柔らかく私を見つめていた。

ん？　そういえばなんで見つめ合ってるわけ？

「あのう、ええっと……」
「オリヴァーです。オリヴァー・ロルフ・ビルケンシュトックです。ドイツから来ました」
「オリヴァー、さん？」
「オリーのフロインドゥ、オリーと呼びます」

フロインドゥってなんだよ、ドイツ人。
よくわかんないけど、とりあえず笑っとけ、と再びよそ行き笑顔をむけると、ドイツ人も今度は満面の笑みで答える。ただし、顔は怖い。

それが、私――鈴木麦子（すずきむぎこ）と隣のドイツ人、オリヴァー・ロルフ・ビルケンシュトックとの初遭遇だった。

＊＊＊

引っ越しの挨拶にいただいたワインは、さすがドイツ産。
甘くて、スパークリングで、めっちゃうまかった。あんまし誉められたことではないが、近くのスーパーで同じ銘柄の値段を見てみれば、そこそこいいお値段。ダンケ、ドイツ人！
両親はともにアルコールを摂取しない人たちなので、二本あったそれはすべて私の胃の中に消えた。
小さなコップ半分のビールでも酔っぱらう両親から、どうしてこんな酒豪が生まれたのかはわからないが、ただで飲む酒ほどうまいものはないね！
現金にも、そんなことでお隣さんを敬っていた私だったのだが。

「オカエリナサイ！　夕飯はおでんです」

なぜそのドイツ人がうちにいる！
会社から帰って玄関に入ったら、いきなり壁があった。というか、壁だと思ったら、件のドイツ人だった。
見慣れた玄関が、すんごく小さく見えるのは私の目の錯覚じゃないと思う。
品のいいグレイのシャツと黒いスラックスに身を包んだドイツ人は、私からの返答を待っているのか、にこにことしたまま動かない。いや狭い、狭いから。

「た、ただいま？」
「今日、ドイツのビーア持ってきましたよ。コムギ、ビア好きですよ」

好きですかって訊いてよ、そこは。まあ、間違ってはないけれどもさあ。ていうか、ドイツ産？　ドイツ産のビールって言ったか、今！
いやいや待て待て、落ち着け私。その前に正すべきことがひとつあったぞ、ドイツ人。

「コムギってなに、コムギって。私は麦子！」
「ムギコはコムギ。ムッタァ、オリーにコムギいいよって」

確実に五十センチは上にある理性的なゴリラ顔を睨み付けると、ドイツ人はいたずらを怒られたような表情をして、たどたどしく弁解する。
えらい低音のいい声でんなしゃべり方されると、殴りたくなるくらいに可愛いじゃないか。
というのはおいといて。

「つまり、お母さんがオリーに『麦子のことはコムギって呼んでいいのよ～』なんて勝手なことをぬかしやがったと。そういうことでオーケー？」
「Ｊａ！」

あの天然母がよけいなことを！
ただでさえ低身長に童顔のこの外見のせいで、不当な扱いを社会から受けているというのに。できれば、正しく「麦子さん」と呼んでいただきたい！
二十五歳の淑女らしく扱ってもらいたいんだよ、無理っぽいけどね、すでに。きょとんとしてこちらを見ているドイツ人に、私は大きくため息をつく。ここは気を取り直して！

「オリー、おでんは初めてなの？」
「初めてです。ムッタァ、オリーのうち来て、入れって言いました。オリーはとても嬉しゅうございます」

なぜ最後だけそうなる。
吹き出すのをこらえ、目をキラキラさせるドイツ人を従えてダイニングへと移動。　本国にいる時、知り合いの日本人と日本映画で言葉を学んだという彼は、時々面白い言葉遣いをする。あえて、訂正はしない。
部屋に入ると、母はテーブルにおでん鍋をセッティングしているところだった。冬はこれこれ、これだよねえ。
あ、そういえば重要なことをさっき聞いた気がする。

「ドイツビールあるって？」
「あら、おかえりなさーい。オリーちゃん、誘っちゃったあ」
「ああ、うん。今さら言われなくてもすごい存在感あるしね」

私と母のやり取りをにこにこしながら見ているドイツ人は、やっぱりいかつい。
これで「悪い子いねがあ！」って来たら、なまはげに勝てる。ぶっちぎりで。

「コムギ、ビーアはここです。オリーのダチ、送ってくれたよー」
「おっ、オリー、すっかり『ダチ』をマスターしたね」
「した！」

誉めて伸ばす。うん、成功成功。
初めて会った時にドイツ人が言っていた『フロインドゥ』ってのがわからず、辞書を引いた私。それが日本語で言うところの『友達』だとわかって、斜め上に教えました。いいんだ、『ダチ』って格好いいし。
まるで忠実な大型犬種のように、できたできたと喜ぶドイツ人の腹を、よしよしと撫でてやる。できれば頭を撫でてやりたいところだけれど、悲しいことに私の手が届くのは腹あたりまでだった。屈、辱！
それをくすぐったそうに受けていたドイツ人。何を思ったのかそのでっかく厚い手で、お返しとばかりに私の頭を撫で回してきた。ちょ、やめ、首が首ががくがくするから！

「あらあ、仲良し！　素敵ねえ」
「お母さんっ、止めてっ！　止めてよ、私死ぬから！　頸椎（けいつい）やられて死んでしまうから！」
「コムギ、バカかわいいですねえ」
「いやそれ嬉しくないから。全然嬉しくないかんねっ！？」

なんとかその手の下から抜け出した私は、とにかくまずは着替えてくる、と慌てて自分の部屋へと一時避難したのだった。

おでんとすき焼きとソーセージ

「いただきまーす！」

部屋着に着替えた私が食卓につくと同時に、三人手を合わせて鍋に一礼。ちなみに、部屋着がユニクロの子供用だということは、私だけの秘密だ。

さっそくビールに手を伸ばす私を、それを持ってきたドイツ人は嬉しそうに見ている。

「コムギはドイチュの人みたいですね」

「まあ、負けないくらいにビール好きなのことは認めるよ」

日本人がドイツドイツと呼ぶ国は、本来は『ドイチュランド』と発音するらしい。

このムキムキのドイツ人が、『ドイチュ』と口にする様は、激しく可愛い。チュってもう、ねえ？

そのドイツ人も持参した馬鹿でかいジョッキでぐびり、とビールに口をつけた。彼が言うにはこれが普通サイズとのことだが……あなどれんな、ドイツ！

にしても、うまい。

ワインに引き続き、これだって輸入食品を扱う店に行けば、けっこうな値段するぞう。しかもわざわざ本国から送ってきたって。もしかして、金持ち？

ちくわぶの熱さに、はふはふ言いながら涙目になっているドイツ人を横目で見ていると、何を思ったのか新しくビールを開けて差し出される。

そうかそうか、あんたの中では私はそういう生き物か。よし、ありがたくいただく。

「麦子ったらあ。本当に、誰に似たのかしらねえ。こんなちっちゃいのに、そんなにどこに入っていくのかしら」

「ちっさい言わないっ」

「コムギ、バカ可愛いですよ」

「フォローになってないっ」

お客様の中に、ツッコミの方はいらっしゃいませんか！と叫び出したくなるような惨状に、今はここにいない父の存在を思う。が、よく考えれば気の優しい父は常識人ではあるが、天然おっとりの母にさえツッコミをいれられない人なのであった。

しかたなく、昆布を口に放り込みながら考える。ここは話題転換を要求しよう。うん、それがいい。

「ねえ、オリーは日本でなにやってる人なの？」

なぜかおでん鍋の中に入っているソーセージを箸で器用につまみながら、ドイツ人は私の問いかけにこちらを見る。ドイツ人とソーセージ。絵的には間違ってない。

どうせ母が『ドイツ＝ソーセージ』くらいの短絡的な勢いで、普段は入れないそれをぶちこんだということだろう。味は悪くはないけどさ。

「オリーは、守る人です」

「守る人？　なにそれ、何から？」

なぜか甲斐甲斐しく手渡された三本目のビールを飲みながら、私は首を傾げる。

ていうか、おまえは私の嫁さんか。ふたまで丁寧に開けてくれてるから、私は飲むだけ。それでいいのか、ドイツ人！

「タマが飛んでくる。オリーはそれから、守る人です。仲間に指示します。怒ります。蹴り返して、仲間助けます」

うえええ。なにその危険なお仕事。

そのがたいからして、どうやっても堅気のお人じゃないとは思ったけれど、それはつまり――。

「まあ、かっこいいっ。ＳＰねっ、ＳＰなのねえっ」

「ＳＰ？　オリー、ＧＫですよ？」

「ドイツではそう言うのかしら？　身体をはるお仕事なのねえ」

もっと食べなさい、と何やら感激しきりの母が、ドイツ人の皿に大根やらはんぺんやらを特盛りにする。

ＳＰかどうかはともかく、このドイツ人が何かの警備員らしいってことはわかった。

見た目はともかく、意外と細やかで優しい彼がそんな荒事を生業にしているとは、意外である。怒るところなんて、想像もつかないけれどねえ。

見慣れてくると多少可愛く感じられるその笑顔を見つめていると、何を思ったのかドイツ人、今度は袋の中からワインを取りだしてみせた。

「ヴァイスヴァイン？」

「オリーは私を正しく誤解しているよ！　いただきますっ」

文句は忘れず、しかし私は素早く立ち上がって食器棚からワイングラスを二脚取りだし、目の前に置く。

心得ているとばかりに見事な所作で手早くコルクを抜いたドイツ人が、なみなみとそれに淡い金色の液体を注ぎ、私たち二人は気分良く杯を持ち上げた。

「こういう時、ドイツではなんて言うの？」

「プロースト！」

嬉しそうにそう言う彼につられて、私も思わずにっこりと笑う。

「プロースト！」

＊＊＊

そんなこんなで始まった、いかついドイツ人とのご近所付き合い。その私たちふたりは今、なぜか近所のスーパーで一緒に買い物なんかをしてしまっている。

しかも、まるで恋人のように手まで繋いでいる。な、なぜ？

隣で口笛を吹いてご機嫌なドイツ人を恐る恐る見上げると、それに気がついた彼はますますその笑顔をきらめかせた。

こらこら、そこらの子供さんが顔を引きつらせていますよ、ドイツ産なまはげに。

「ムッタァが、今日はスキヤキですよ。お買い物、行って来い！オリー、スキヤキの歌、歌います？」

「歌わんでいい、てかスキヤキの歌ってなんぞ！」

ぶんぶんと繋いだ手を振るドイツ人に、私は文字通り振り回される。やめれ！

合わさった手のひらの大きさもそうだが、歩幅もずいぶんと違うはずなのに、気がつけばドイツ人は私に合わせて歩いていてくれていた。
それに気付いて、なんとなくそわそわする。この小学生的外見から、今まで学校や会社ではさんざん子供扱いはされてきた。けれど、こういう風に女の子扱いされたことはない。欧州的エスコート術なのか！？
しかし、所詮はゴリラと見た目小学生。スーパーに入ったときから、周りの目が痛い。
なんていうか、「あれは親子？」「いや、違うでしょう」みたいな会話がね、背中から聞こえてくるわけですよ。
うう、早くお買い物すませて返ろう。

「ええっとオリー、野菜から行くよー……っておい！　何してんの！」

渡された買い物メモを見ていた私がそう言って、静かになった隣を見てみれば、店内で目立ちに目立ちまくっているドイツ人の姿はソーセージコーナーの前。お前はパブロフの犬かっ！
慌ててそちらに近寄って行くと、その気配を感じて振り返ったドイツ人の瞳がすっごく輝いている。もう眩しいくらいの青い瞳。

「コムギ！　これ素敵ですね！　グートゥシェーン！」
「はあ？」

野球のグローブかと思えるほどにでかいその右手に握られていたのは、まさかの子供用ソーセージ。魚肉。しかも、戦隊もの。
まだ隣の女の子向け魔法少女にひかれなかっただけ、マシなのか？

「これ、カコイイ！　コムギ、買って！　買って！」

「どこのお子様なのよ……」

ものすごい勢いでアピールしてくるドイツ人に呆れた視線を送るが、当人はどこ吹く風でこちらに迫る。だから、遠近感狂うからそんなに近付くなって。

「そんなの、高い割には中身があんまし入ってないし、却下」

「悲しゅうございますよ！　オリーはこれが必要なものだと考えます。素晴らしいデザイン、オリギネル！　中には四つ。ファータァ、ムッタァ、コムギにオリー。最高です。仲良しの証ですね！　いかがですか？」

「いかがですもなにも」

あなたはなぜスーパーのソーセージコーナーで、とどろく美声を使って演説なんかを始めちゃったりしているんですか、と小一時間こっちが問いつめたいわ。

さっきまでは怖いもの見たさだったお客さん達が、あまりのくだらないこのやり取りに、くすくすと笑い声を漏らしている。

期待に満ちた顔でつきだされたそれを受け取るかどうか迷っていると、くいっと服の裾を誰かに引かれた。

驚いてそちらを見れば、小学生低学年の男の子がひとり。何だかしたり顔で私を見詰めている。

「姉ちゃん、買ってやれよ。可哀想だろうが！」

哀れむような瞳を向けられたドイツ人は、わかってるんだかわかってないんだか、思わぬ援護射撃に大きく頷いた。なにこれ、私悪もんくさくない？

頼んだぞ、となぜか偉そうに言い置いて、同じソーセージを掴んだ男の子は、先で待つ母親のもとに走っていく。た、頼まれてもな

あ。

「コムギ……」

「あーもう、わかった！　ひとつね、ひとつだけだからねっ」

やけになってそう叫ぶと、オリーはぱっと顔を輝かせ、突然私の身体をぎゅうっと抱き込む。ええええ。

大きな背中を折り曲げて私を胸の中に閉じこめると、頭のてっぺんに頬をすりすりとすり寄せてきた。

ちょ、ちょ、ちょ！　あの、なんか心なしか私の身体、地面から浮いてますよね！？

「Ｉｃｈ　ｌｉｅｂｅ　Ｄｉｃｈ、コムギ……」

「わわわわかった、よくわかんないけどわかったからっ」

「Ｓｅｉ　ｄｏｃｈ　ｉｍｍｅｒ　ｂｅｉ　ｍｉｒ　ｎａｈｅ　ｚｕｍ　Ｇｒｅｉｆｅｎ……」

ええい、何を言っているのかわからん！　ジャパニーズプリーズ！

ドイツ人はじたばたと暴れる私の身体をそっと離すと、少しだけ頬を染めて微笑む。その青い瞳がなんだか熱っぽく私を見つめるのは、なんでだろう？

呼吸的な意味で真っ赤になった私に、再びそのいかつい顔が近付いて、そして。

ちゅっ。

鈴木麦子二十五歳、初めてのキスは近所のスーパー。しかも、ソーセージコーナーの前でした――。

日独同盟破棄！？

「日独同盟を破棄したい。切実に、ものすごく！」

日本酒の入ったコップを割れない程度にがつん、とこたつの天版に叩きつけ、私は隣に座るでかい生き物を睨み付けた。

ダイニングから続く居間、テレビの前のこたつにて。なぜか満足げな顔をしたドイツ人は、心得たように私のコップにお酒をつぎ足している。いや、間違ってないけどそうじゃないっ。

「みかん、おいしいですね」

「田舎からの直送だぞ、当然！　……じゃなくて、ちょっと近いっ」

そもそもこたつって四面あるじゃないの。どうしてわざわざ隣に座るのかなあ！？

しかも、無理矢理隣に身体を押し込んできたドイツ人は、ぎゅうぎゅうと私に寄ってくる。おいこら、懐くんじゃないっ。

「狭いっ！　オリーはあっちに座ってっ」

「狭い？　オリーは狭くないですよ？」

でっかい手でちまちまとみかんの皮をむくドイツ人は、私の言うことがまったくわからないとでもいうように、ことっと首を傾げてみせた。か、可愛くなんかないんだからねっ。

「誰があんたの意見を訊いた！　私が狭いのっ。潰れるのっ」

その言葉にドイツ人は大きく頷くと、むき終わったみかんを黙ってこちらに差し出した。反射的にそれを受け取ると、私はなぜかそのまま彼に抱き上げられてしまう。えええええ！
両脇に差し込まれた大きな手のひら。それがふわっと私の身体をいとも簡単に持ち上げる。そうして自分の足の間へと私を降ろし、そのごっつい腕が腹にぎゅっとまわって、拘束完了。

「これでコムギ、狭くないですね？」
「ばばばばばば」

あまりのことに、罵声さえ出てこない。
それをいいことに、ドイツ人は私の耳にやたら可愛らしいリップ音を響かせてキスをした。なんだこれなんだこれなんだこれ。
そして、匂いを嗅ぐように首筋にその高い鼻を埋められたところで、私はギブアップ。あぐあぐと白いタオルを求めて、ちょうど追加のみかんを持ってキッチンから戻ってきた母に、必死に手を伸ばす。れ、レフリー！

「あらあ、素敵！　昔のお父さんと私を見てるみたいっ」
「娘の貞操の危機だっつの！　ここは怒るところだから！　ボケるとこじゃないからっ」
「えー？　だって、ハーフの赤ちゃんて天使みたいでいいわよねえ？」
「オリー、頑張りまするよ！」
「あんたは余計なところに参戦すんなっ」

首にキスしてくるドイツ人を、手のひらで押しのけて、私は叫ぶ。
するとそれ以上のことはせず、彼はとろけるように甘い笑みを私に向けた。自然と自分の顔が赤くなるのがわかる。く、悔しい。

「に、日本酒、おかわりっ」
「Ｊａ！」

＊＊＊

あのあと、なんでか客室にお泊まりしていたドイツ人に私が叩き起こされたのは、次の日の朝。日曜日の七時三十分。正気の沙汰とは思えない。私の日曜日を返してよう！
ていうか、未婚女性の寝室に勝手に入ってくるって、あんたの国は騎士の国だろうがっ。

「コムギ、早く早く。始まりますよ！」
「ううう、何がよ……？　って、ちょ、抱き上げるなっ」

何かそわそわしているなと思っていたら、なかなか起きあがらない私に焦れたドイツ人は力業に訴えた。
つまり、パジャマ姿の私をベットから抱き上げ、そのまま階段を下りて居間へと向かう暴挙に出たのだ。。小学生体型とはいえそれなりに重いはずの私を抱えても、ちっとも危なげのない足取り。素早くテレビの前までやってくると、こたつの中に私を押し込んだ。
そして、キッチンからオレンジジュースを持ってきて私に渡す。そのまま当然のように私を背後から抱き締め、彼もこたつへと足を伸ばした。待て、この位置はもう決定なんですか。
寝起きの頭に次々と浮かぶ疑問は、あわあわという不明瞭な言葉でしか出てこない。そんなことにおかまいなし。ぷちん、という音とともにテレビを点けると、ドイツ人は私の頭を顎でぐりぐりと撫でてきた。
痛い痛い痛いってばっ。

「ソーセージ、始まりますね」
「意味がわからない！」

画面を太い指でさすドイツ人に不機嫌を伝えつつ、私はオレンジジュースを一口飲む。気遣いのできるいい人ではあるんだよ。ちょっと斜め上に行きがちだけど。

まだ眠気の取れない目をごしごしと擦っていると、どこから出してきたんだか、まだほかほかしている濡れタオルで顔を拭われた。なんか、介護？

少しずつ覚醒していく頭の隅でそんなことを考えていると、目尻にちゅっとキスされる。

ゆ、油断も隙もあったもんじゃないね！

「ほら、コムギ！」

赤くなった頬を誤魔化すように首を振った私に、妙にはずんだ声でドイツ人が再び話しかけた。だから、なにがどうしてなんだというの！

促されるまま、仕方なくテレビに目をやった私がそこで見たものは――。

『あーいーとーゆーうきー！　かかげーてーゆくーんーだー！　ライオンジャー！』

……ああ、ソーセージ。うん、ソーセージね……。

何が悲しくて二十五歳独身女性が、三十五歳ドイツ人と一緒に日曜の朝から戦隊ヒーローを見なければならないのか。

そんな疑問に思いっきり脱力してしまった私は、背後にある広い胸に背を預け、大きくため息をついた。その行動に何を勘違いした

んだか、より密着してきたドイツ人は、ライオンジャーについて一所懸命説明をしてくれる。

「ライオンジャー、悪いと戦います。レッヒトウントフライハイト！」

「うんうん、はいはい。ライオンジャー、かっこいいねっ」

いい加減あきれて適当にそう返すと、ドイツ人はなぜか一転、悲しそうな顔になる。

まるでジャーマンシェパードがご主人に叱られて、耳と尻尾を垂らしているが如く。あれ、でも今私、ちゃんと同意したでしょうが。何が不満じゃっ。

「オリーとライオンジャー、どっち？」

「は？」

「オリーとライオンジャー、どっちが素敵ですか？　どっちを愛していますか？」

ええええええええ。そういう話なの！？

口元は微笑んでいるけど、真っ青なその目がまったく笑ってない。顔怖い、顔が怖いよ。

どう答えればこの地獄から抜け出せるっていうのっ。

「コムギ！」

ええいっ。

迫り来る悪鬼の如き顔に耐えきれず、私は思わずぎゅっとその首に腕を回した。しかし、太い首に身体だ。膝立ちになって両腕を回しているというのに、私では彼の身体を抱き締めきれない。

その鍛え上げられた固い身体の感触に、走り込みと筋トレを趣味

とする私はつい感動してしまった。胸板厚いなあ！
すると突然、強い力で抱き締め返される。ぐあああああっ。さばおりっ、さばおりになってるってえ！

「ラブ注入！」
「どこで覚えたそんな言葉ーっ！　ていうか出ちゃうっ、内蔵が出ちゃうっ」
「コムギ、Ｍｏｅｃｈｔｅｓｔ　ｄｕ　ｍｅｉｎｅ　Ｆｒａｕ　ｗｅｒｄｅｎ！？」
「くくく、苦しいってば！　もうっ、わかった、わかったってばあああ！」

その後さんざん締め付けられてぐったりした私の顔に、ちゅっちゅとキスを降らせたドイツ人は、朝ご飯までしっかり食べて自分の家へと帰って行った。
この時、自分が何に同意してしまったのか、私はまだ知らない。なんていうか、ドイツ語なんて嫌いだっ。

モアフェイマスセレブゴリラ！

そんなこんなでひどい週末を送った、月曜の朝。
いつも通りに出勤した私は、隣の席の後輩がいそいそと机の下に何かを挟み込んでいるのを目撃した。あれは……グラビア？
「羊子（ようこ）ちゃん、羊子ちゃん、なになに、それ。沖縄消防団の半裸カレンダー？」
「いやだ、麦子先輩っ。いつ私がそんな破廉恥なもの持ってきました？」
「先週」

お弁当組がお昼を食べる会議室で披露したことを、よもや忘れたとはいわせんぞ！
しかも、それはいまだこの残念な美人である後輩のロッカーに、思いっきり貼られている。どの口が言うかっ、と後輩をぴよぴよ口の刑に処した私は、改めて机の下の写真に目をやった。
それは、どこかで見たような、いかつい顔の外人が写ったポスター。
薄い金色の短髪に、青い瞳。高い鼻にがっしりとした輪郭。太い首に分厚い身体は、何かのユニフォームに包まれ、白い網の前で仁王立ちになっていた。なんていうか、浅草によくいる風と雷の神様っぽい感じ。写真なのに、威圧感が半端ない。んん？
いやあ、世界にはよく似た人間が三人いるっていうけれど、ねえ？
「あらっ、麦子先輩も好きですか、この人！　いい具合にムキムキで素晴らしいですよねえ。この不動明王かってところが素敵……」

うっとりと舐めるような視線で、羊子ちゃんは机に挟んだその写真を見つめて言う。
普段から「細マッチョとかもうあり得ないです！　マッチョって単語に謝れ！」と憤慨する後輩は、無類の筋肉好きだ。
羊子ちゃん、お願いだから帰ってきて！　現実に！

「いや、好きっていうか、なんかよく似た生き物を最近見かけるっていうか」
「えっ！　それ本人じゃないんですかっ。彼、日本に長期滞在中なんですよ！」
「ち、違うと思うなあ。だって、その人警備の仕事してるって言ってたし」

俄然本気モードに入った羊子ちゃんをいなしながら、私は誤魔化すように笑う。
いやいや、まさか、ねえ。だってこれ、どう見ても有名人じゃないの。ばりばりに。
あのすっとぼけた日本語を話すドイツ人と、絶対違うって。違う違う。違うはずだ！

「なんか、飛んでくるタマから何かを守ってる人らしいよ。部下に指示出したり、蹴り返して助けるんだって。だから、こんな風に雑誌に載ってるわけないってえ」
「せせせせせ先輩？」

前にドイツ人から聞いたことをそのまんま伝えた私に、羊子ちゃんがイケてるＤＪ状態に陥ってしまう。なになに、どうした。
そして、がしりとおもむろに私の肩を掴み顔を近付けると、内緒話でもするようにひっそりと口を開いた。

「先輩、その人もしかしてオリヴァー・ビルケンシュトックさん、じゃないですよね？」
「え、オリーだけど？」

何で知ってるの、と私が訊き返そうとした瞬間。
羊子ちゃんが爆発した。

「のおおおおおおおおおおおおおおおっ！」

幸いにしてまだ出勤ラッシュには早い時間だったため、遠くにいる営業部長がびくうっとこちらを振り返っただけで済む。
私は片手を上げ、何でもないことをアピール。部長は私にむかって軽くうなずくと、またもとの体勢に戻ってくれた。いい人だなあ。
当の羊子ちゃんといえば、思いっきり叫んだきり、そのまま真っ白い灰になっちまっている。叩いたら直るかな、これ。
しょうがなく、私たちが社内で密かに作っている、自主的運動部の合い言葉をささやいてみた。

「好きな痛みはっ？」
「筋肉痛！　って違ああああうっ！」

反射的に反応して復活してくれた羊子ちゃんは、ひとりで見事なノリツッコミをしてみせると、ぶんぶんと首を大きく振って仕切直した。

「麦子先輩、よおおおく聞いてくださいね。そのオリーはですね、サッカー選手なんですよ！　しかも、超有名所ですっ。世界レベルですっ。モアフェイマスセレブ！」

なんだその怪しい英語は、と突っ込もうとして止まる。今、なんて言った？
サッカー選手で、有名人。しかも世界レベルで？　あのドイツ人が？
いや、だってあの人、日曜だって土曜だって家にいるし。そりゃあ、毎朝一緒に走り込みしたりしてるけど、基本仕事してるのかしてないのか怪しいところだし。
まあ、平日私が会社にいる間は何をしているのか知らないけどさ。お金にはまったく困ってもないみたいだけどさ。

「ないない！　他人のそら似に違いないよ！」
「同姓同名のそっくりさんは、もうそれ本人ですから！」
「だだだだって、このゴリラがサッカーしてるの見たことないよっ。身体は鍛えてるみたいだけど、基本自宅警備員だよっ」
「引退したんですよ、ついこの間。ドイツの名門クラブでずうっと第一ＧＫで、しかもドイツ代表選手。なんでかすぐに来日して、どっかのチームの臨時コーチしてるはずですよ？」
「サッカー詳しくないし！」

ショックから回復した羊子ちゃんに代わって、今度は私がガクガクブルブルと震え出す。聞いてない。まったく聞いてない。
いや、ドイツ人は言ったつもりかもしれないけれど、私を含めて母も彼が警備の仕事をしてるって今の今まで信じてたんだよ。母はきっとまだ信じているよ！
油が切れたロボットのような動作で、私はショック状態のまま無言で席に戻り、ノートパソコンを開く。忘れよう。ここから一時間前の記憶を削除しよう。ええと、デリートボタンはどこだ。

「麦子先輩、それ電源入ってないです。それに、デリートキーをどんだけ押しても、現実は消えないですからねー」

冷静な後輩のツッコミが痛い。ううう。
そんな風に始まった私の月曜日が、前日のごとく散々だったことは言うまでもない。あきらかに挙動不審な私を、同僚や上司は心配そうに遠巻きに見る。なぜか色々な菓子を献上されるのは、私の見た目があれだから。
いつもなら「Ｎｏｔ！子供扱い」と断るが、今日はそんな余裕すらなかった。頭の中をゴリラ的な何かがぐるんぐるんと駆けめぐる。
午後になっても立ち直れない私は、上司から早退命令を発令され、会社から帰されてしまった。しかも、なぜか羊子ちゃんがロッカーに常備していた、あのドイツ人の写真集なるものも持って――。

＊＊＊

『オリヴァー・ビルケンシュトック　霊長類最強ゴールキーパー！』
会社から帰り、早々と部屋着に着替えてベットに転がった私は、羊子ちゃんから借りてきたその本をぱらぱらとめくってみた。中身は意外と硬派な記事と写真が満載。いい太股だあ、とか思ってないよ、多分。
そこに写っていたのは、雄叫びを上げているような顔。横っ飛びになってボールをキャッチしている姿。仲間と肩を組んで笑って、時にゴールに寄りかかり涙を落とす写真たち。
それは私の見たことのない、隣のドイツ人の姿だった。なんとなく、赤面。
恥ずかしさを誤魔化すように、私はひとりごちてみる。
「これ、本当にオリーなのかなあ」

「本当にオリーですよ」
「うわあああああああっ」

こっそりとエロ本を見ていたら、母親に乱入されてしまった男子中学生かってくらい、私はベットの上で跳ねる。かけられたその声に振り返れば、奴がいた！
だから、なんで、うちにいるの！　ドイツ人！
私は慌てて枕の下に写真集を隠そうとするが、間に合わない。それはさっさとドイツ人に取り上げられてしまった。
そしてなにやら真面目な顔で写真集と私を見比べると、満面の笑みになる。うわあ、嫌な予感しかしない、この展開。

「本物がここにいますよ、コムギ……」

ぎしっとドイツ人の重みにベットが軋む。ななななんだ、この生々しい音っ。
寝っ転がった私の身体を、囲い込むようにのしかかってくるドイツ人に息を飲む。そっと、その手のひらが私の頬に触れ、親指がゆっくりと肌を撫でた。
ぞわり、と不快ではない感覚が背筋を駆け上る。

「フォートよりもオリーのほうが、ガンツグゥート！」

そう言うなり唇に柔らかい感触。何度されても慣れない口付けに身体の力が抜け、私はベットへと沈み込んでしまった。よくわからないけど、ずるい、と思う。
角度を変えて何度でも重なってくるそれが、いつの間にか私の唇を割って深く深く。何もかも飲み込むように、奪うように、どこまでも追いかけてくる舌。
酸素を求めてドイツ人のがっしりとした肩を叩けば、ものすごく

未練たらしく、最後に軽いキスを残してそれは離れていった。
甘く痺れる頭も身体も、筋肉質な彼の高い体温に支配されている。ざらりと耳に触れたドイツ人の顎。その髭のそり残しの感触にまで、反応してしまう。

「アレスクラァ？」

上質のベルベットでも撫でているような低音を耳に吹き込まれ、私は意味もわからずがくがくと頷く。
そんな私にドイツ人は満足そうな笑顔をむけた。
大きくて固い手のひらが、乱れた私の前髪をさらりと撫でつけ、そのこそばゆさに私は少し肩をすくめる。

「Ｉｃｈ　ｂｉｎ　ｉｎ　ｄｉｃｈ　ｖｅｒｌｉｅｂｔ．」

小さくささやかれた異国の言葉が切なく響いて、私はそっとドイツ人に手を伸ばし――むにっとその頬を思いっきり摘んだ。調子に乗るでないっ。
多分真っ赤になっているであろう顔のまま、四つん這いで私を覗き込むドイツ人を睨み付ける。それでもへらりと嬉しそうに笑うドイツ人は、もう本当にどうしようもない。
再びゆっくりと寄せられる唇に、私は今度こそ諦めてそっと目を閉じた。

モアフェイマスセレブゴリラ！（後書き）

ドイツさんと私、ここでいったん完結となります。
このあと、オリー視点のお話を続けようと思っていますので、よろしければそちらも覗いてくださると嬉しいです。

妖精との出逢い

初めて彼女を見たとき、俺の身体はパンツァーファウストの直撃を受けたかのように、ものすごい衝撃にみまわれた。

ドイツからほとんど身ひとつで来日して三日目の夜。
引っ越しの挨拶は大事だろうと、本国から持参したワイン二本を手に隣の家までやってきたはいいが、チャイムを押しても返事はなし。そのまましばらく反応をうかがうが、どうやら留守だったらしい。
多少がっかりして、また後で来ようと振り返ったそこに、彼女がいた。
見るからに華奢な身体はぴっしりとしたスーツで包まれ、一見して働く女性なのだとわかる。しかし、肩から提げた鞄のほうが大きく見えるくらい、彼女は小さかった。
自分が手をかざせば余裕で包み込めるほどに小作りな顔には、印象的な大きな黒い瞳。繊細な睫毛に縁取られたそれが、綺麗に切り揃えられた前髪の下から、警戒心も露わにこちらを見つめていた。
がん、と脳みそを揺さぶる衝撃。これは、まさか妖精か！？

「コンバンハ！」

反射的にかけた俺の声に、小さな彼女はびくうっと肩を揺らす。大きな瞳がさらに大きくまん丸くなり、魅力的な桜色の唇がぽかんと開けられた。

彼女はどうやらこの家の住人らしい。警戒しながらも意を決したように、そろりそろりとこちらに歩み寄ってくる。
その姿たるや、まさに皇帝ペンギンのヒナ！
いや、むしろ俺の大好きなティディベアそのもの！
今すぐにでも抱き締めて、自分の家まで持って帰りたい衝動を抑えつつ、俺はすぐそばまでやってきた彼女に持っていたワインを差し出した。

「隣に、来ました。オミヤゲ？」

その言葉に彼女の視線は俺の手元に落とされ、一瞬の後、ぱっと上げられた顔には大きな喜びが溢れていた。
輝かんばかりのその可愛らしい笑みに、俺の胸が不規則に脈打つ。
おかしい。健康面に不安はなかったはずだが。
ぼんやりと彼女を見つめる俺にむかって、小さな手がそっと差し出された。俺ははっと我に返り、袋を渡したところで細い指に指が触れ、再び身体にびりびりとした何かがほとばしる。不快ではない。むしろ、快楽に近いその感覚。

「わざわざご丁寧に、ありがとうございます」

そうして、ずいぶんと高い位置にある俺の顔を覗き込むように、彼女はもう一度にっこりと笑顔を見せてくれた。
三度目の衝撃。
チャンピオンズリーグの決勝でＰＫ合戦になった時にも感じなかった、興奮。息切れ。目眩の症状に、俺は自分の頬が熱くなるのを感じる。これは、もしや……恋、なんだろうか。
できるならばこのまま、ずっとずっと彼女の姿を目に焼き付けていたい！
そんな風にじっと凝視している俺に、彼女は少しいぶかしげに眉

をひそめ、困ったように声をあげた。

「あのう、ええっと……」

「オリヴァーです。オリヴァー・ロルフ・ビルケンシュトックです。ドイツから来ました」

すかさず自分をアピール。ナイスパンチングだ、俺。

絶対絶対絶対絶対、彼女に自分を覚えてほしい！

その小鳥のような声で自分の名前を呼んでほしい！

「Ｓｉｅ」なんてすっとばし、「ｄｕ」と話しかけられたって、喜んでそれに応えよう！

「オリヴァー、さん？」

「オリーのフロインドゥ、オリーと呼びます」

そう俺が重ねて言えば、彼女は少し考えた後、大人びた微笑みをこちらに向けた。俺も今度こそとびっきりの笑顔でそれに応える。

本国にいるときのように、この可憐な妖精にどうか怖がられていませんように、との願いを込めて。満面の笑みで。

それが俺――オリヴァー・ロルフ・ビルケンシュトックと、隣の小妖精、鈴木麦子との運命の出逢いだった。

＊＊＊

そもそも俺が本国ドイツから、遠く離れたここ日本にやってきたのは、日常につきまとうわずらわしさから逃れるためだった。

長年人生の一部だったゴールキーパーという仕事を辞してから、

俺を追いかける記者たちときたら、やれいつ監督になるんだ、いつ結婚するのかとこうるさい。
心底疲れていたそんな時に出会ったのが、かの有名な日本のアニメーション。
それは古き日本を舞台にした、心温まるファンタジー。二人の幼い姉妹がふくろうのような森の妖精と心を通わせる物語。素晴らしすぎる！
俺は泣いた。三日ほど泣いた。号泣だった。
話自体もそうだが、俺が特に心惹かれたのは森の妖精。その中でも、あの小さい白いやつ。それがちょこまかと歩く姿は、俺のゴールマウスを見事に突き刺さった。
こんななりをしていても、昔から小さく可愛らしいものが大好きで、本当のプライベートな寝室にはこれでもか、というほどシュタイフ社製のティディベアが並べられている。もちろん、ひとりひとりに名前まで付けて。
幸い俺は独り者だし、金にも困ってはいない。そこで急に思い立つ。そうだ、日本、行こう！
そうして、取るものも取りあえず、俺は憧れの地日本へとやって来たのだった――。

『聞いてくれ、モトハシ。俺は昨日妖精に会った。いや、天使かもしれない』
「スタッフー、医療スタッフー！」
開口一番俺がドイツ語でそう告げると、クラブチームで一緒だったことのある元ＭＦで現コーチのモトハシは、青ざめた顔でスタッフを呼んだ。

『なんだ、誰か怪我でもしたのか？　この大事な時期に』
『うん、なんか確実にひとり、痛いこと言ってる人がいるよね。俺の目の前に』

季節は冬だというのに、なぜか額から汗を流しながら、モトハシはわけのわからないことを口にする。思わずしかめっ面になった俺を見て、呼ばれて出てきたスタッフは一瞬にして回れ右。そのままスタッフルームへと戻っていった。
怖がられるのには慣れているが、さすがにちょっと寂しい。
あからさまにへこんだ俺を見て、モトハシは笑って肩を叩いた。

『すぐ慣れるって。時が経てばわかることがあるって言うだろう？』
「Ｊａ，　Ｋｏｍｍｔ　Ｚｅｉｔ，　ｋｏｍｍｔ　Ｒａｔ．」
『そうそう、それ。せっかく日本語だって勉強したんだし、どんどん話しかけてみろって。特にキーパーたちなんか、おまえに憧れて目ぇきらっきらさせてんだから。俺がお前を引っ張ってきた時なんか、しばらく俺、神様扱いされたもんね』

にやっと彼独特のいたずら坊主のような笑顔に、俺もつられて笑みをこぼす。
俺が今臨時コーチをしているこのクラブチームは、現在ドイツで言うところのツヴァイテリーガに位置している。
現役時代、日本から移籍してきたモトハシと俺とは、彼が帰国して引退してからも交流が続き、今回来日するにあたって色々と世話をしてもらったのだ。
その中のひとつに今の住居もあったが、そう考えるとモトハシは俺と彼女の恋のキューピッドなのかもしれない。
ここはひとつ、モトハシの言うように日本語を使ってこの気持ちを伝えてみようか。うむ、それがいい。

「モトハシサン、オリー、あなたを大切にしたい！」

俺が最大限の感謝の意を声高に叫ぶと、練習場で柔軟をしていた選手やスタッフ一同が、一斉にこちらに顔を向けた。何か、見てはいけないものでも見てしまったかのような彼らの表情に、モトハシは泣きそうな顔で叫ぶ。

「ちがあああうっ！　誤解だっ！　誤解すんなあああっ！」

感謝を受けて当然だというのに、謙遜をするモトハシは本当にいい奴だ。

日本人とは本当にシャイな民族だなあ、と俺は微笑ましくそれを見守るのだった。

妖精との出逢い（後書き）

オリー編、はじまりました。
彼の性格からして麦子の時とは違い、ちょっと固めな感じになるかとは思いますが、しょっぱなから一目惚れしてましたw
まさかのドイツ版オトメンです。また、しばらくお付き合い頂けると嬉しいです。

キスとみかんとミソズッペ

初めて彼女――コムギにキスをしたのは、近所のスーパーのヴルストコーナー前だった。

『ずっと、俺のそばにいてくれ……』

そうささやいて、この胸の中に抱き締めた彼女の身体は予想以上に小さく細く、そして今まで感じたことのないくらい柔らかかった。強く強くそれを感じたいような、壊してしまいそうで怖いような、相反する幸福感に俺の頭はどうにかなってしまう。

サッカーで鍛えた理性を総動員しようやく身体を離した俺が、そっとコムギの顔を覗き込むと、彼女は可愛らしく赤く染まった顔でこちらを見上げた。

少し、非難するようなその瞳は、しかし俺のなけなしの理性をぶちやぶる破壊力を持っていた。苦しかったせいか、大きな黒い瞳がうるんで。

そして俺は、思わずその薄紅色の唇に自分のそれを重ねていた。

信じられないほどの甘い、甘い感触。一瞬だけのその触れあいに、暴走しそうになる自分自身を抑え付けるにひどく苦労する。

ここは人前だ。人前なんだ。押し倒すわけにはいかない。……多分。

何か他のことを考えろ、考えるんだ、オリヴァー。そう、ローマ教皇だ。教皇の顔を思い出せ！

「おっ、オリー？　大丈夫？」

一瞬にして赤から青へと変わった俺の顔色に、恥ずかしそうに辺りを気にしていたコムギが慌てて手を伸ばしてくる。
さすがは教皇。想像以上の破壊力をもって、俺の中の悪魔を追い払ってくださった。気分は……あまりよくないが。
しかし、小さなコムギの手のひらが心配そうにお腹をさすってくれるのは、嬉しい。もしかして、これが試練を乗り越えた俺への恩恵か！

「コムギ、Ｉｃｈ　ｌｉｅｂｅ　ｄｉｃｈ　ｉｍｍｅｒ　ｕｎｄ　ｅｗｉｇ。」

永遠に君を愛する、なんてまさか自分が誰かに告げることになろうとは、今の今まで想像もしていなかった。
むしろ、そんな風に愛に夢中になっている奴らを、「イタリア人でもあるまいし」などと冷ややかに見たこともあった。そんな自分が、今や目の前の妖精に夢中。
その言葉に、コムギは仕方ないとでもいうような優しい目をして、ぽんぽんと俺の腕を叩いて頷いた。

「わかったってば。もう、早く買い物しないと遅くなっちゃうよ？」
「Ｊａ！」

当然のように指しだした俺の手に、少し戸惑ったようなコムギは、それでもそうっとその手を重ねてくれた。潰さないように、傷つけないように、小鳥を包み込むような繊細さをもってその手を握る。
その時俺は確信したのだ。絶対に、彼女と結婚するんだ、と。

＊＊＊

『ということで、日本式プロポーズの言葉を教えてくれ』
「またパンチングでゴール狙うようなことを……」

本屋でそれらしい本を買い込んだはいいが、自分が日本語は話せても読み書きがまだ完璧ではない、ということをすっかり忘れていた。

そう言って、すべての本をどさっとモトハシの目の前に置く。すると彼は頭を抱えて机に突っ伏してしまった。既婚者である彼が頼りなのに。

ドイツであれば同棲したままの事実婚でもいいだろうが、ここは日本、そうもいかない。特に、コムギに対して俺はいい加減なことはしたくないのだ。

将来をしっかりと約束する前に手を出せば、あの優しい両親が心配するだろう。正直、このままでは俺の理性が保たない。

『……婚約して、彼女に早く手を出したい』
『いやいや、その本音は隠しとけよ！』

ぼそりと俺が呟けば、机から勢いよく顔を上げたモトハシが叫ぶ。そうして再び頭を抱えると、何かを思いついたのか、ばしりと机を叩いて立ち上がった。

「こういう時こそ、うちの選手たちだろう！」
「センシュ……シュピーラァ？」
「そう、シュピーラァ。その彼女と歳が近い奴らに助言してもらったほうがいいって。ラートだよ、ラート。そうすりゃ懇親にもなるしなっ」
「Ｒａｔ……」

なるほど、そう言えば主力選手はみなコムギと歳が近い。意外と参考になるかもしれないな。さすがだ、モトハシ！

「ダンケシェーン、モトハシ！」

「ぐわあっ」

感謝を伝えるべく、俺は目の前のモトハシを強く強く抱き締める。何から何まで、本当にしてもしたりないくらいだ。

腕の中で照れて暴れるモトハシの身体をいったん離し、その頬を両手で挟み込む。そして、俺はドイツ人はあまりしないキスというやり方で、最大限の感謝を示した。

右に、左に、もう一度右に、とその時。

がちゃっとミーティングルームのドアが開き、事務の女性が顔を覗かせた。彼女は俺たち二人を見て瞬間的に固まると、そのままそっとドアを閉めて出て行ってしまう。

『なぜだ、ササキサンが戻ってしまった。俺かお前に用事ではなかったのか？』

「うわあああああ！！」

俺がモトハシにそう告げると、彼はなぜか叫び声を上げ、出ていったササキサンを追いかけて行ってしまう。現役時代と変わらず熱いな、モトハシ！

日本人は本当に仕事熱心だ、と俺は感心してそれを見送ったのだった。

そんなことがあってから、数日後。待ちに待ったチャンスが俺の

前にやってきた。
　コムギのムッティに「田舎からみかんが届いたの、食べに来て来て！」との誘いを受けたのだ。神は俺を見守ってくださっている！
　俺は多少よそ行きの服に身を包むと、いそいそと隣の家のチャイムを鳴らした。
　少し間があって開けられたドアから顔を覗かせたのは、毎日でも見ていたいほど愛しいコムギだった。ああ、今日もあの日本アニメの妖精のように、可愛らしい……。

「あ、オリー、早かったねえ」
「グーテンアーベントゥ、コムギ！」
「こんばんは、かなあ？」
「Ｊａ！」

　聞き取れたドイツ語に喜ぶ顔にすかさずキスを贈ると、コムギは手にしていた調理器具で俺の頭を軽く叩いた。照れる姿も初々しく、たまらない。
　こちらを睨み付ける彼女は、まるでコアリクイの威嚇姿にも匹敵する可愛らしさだ。

「もう、油断も隙もないなあ。早く入って！　おみそ汁火にかけたままなんだから！」
「ミソズッペ？」

　ぱたぱたとキッチンにむかって駆けていく小さな背を追って、俺も今や自分の家並みに慣れてしまった廊下を抜ける。キッチンから続くダイニングに入ると、ミソ独特の匂いが鼻に届いた。
　なんだろうか、この幸福感。この場所こそが人類の追い求めてきた楽園なんではないだろうか。そんな感激にひたりつつ、俺はこちらに背をむけて立つ彼女の背に近づいた。

「今日はコムギ、食事つくるですか？」
「みそ汁だけね。お母さん、ご近所にみかんのおすそわけ行ってるけど、もうすぐ帰ってくるよ。あ、そこのお椀取ってくれる？　三つね。お父さん、今日も残業だから」

真剣な表情で鍋を見つめるコムギが、こちらを見ずに指示を出す。これは……なんだかとても、新婚ぽい！
俺は言われたとおり、食器棚から三つ分の木でできたお椀を出す。そうか、コムギのファータァは帰っていないのか。できれば家族が全員揃ったところでプロポーズしたかったのだが、仕方がない。

「オリー、みそ汁よそうから、悪いけどあっちのテーブルに持っていってくれない？」
「かしこまった！」

大まじめに頷いてみせた俺に、コムギはなぜか爆笑しながらお椀を渡す。「熱いから気を付けてね」という言葉だけで、天にも昇る心地だ。
結婚すれば、これが毎日……そう思うと、自然と気合いが入る。それに、昼間若い選手たちから教えてもらったプロポーズの中に、確かミソズッペに関するものもあったはず。
よし、それでいこう！
決意を新たに、テーブルにミソズッペを並べ終えると、俺はいそいそと再びコムギのもとへとむかった。

コムギのムッタァが帰ってきたところで、俺たちはダイニングで

の食事を開始した。
コムギの手料理、コムギの手料理、コムギの手料理。しかも、初めて味わうのだから、感激も深まる。
「オリー、みそ汁の味、大丈夫？」
一口一口大事に味わっている俺を見て、みそ汁が苦手だと誤解したのか、心配そうにコムギが訊いてくる。
ああ、もうだめだ。コムギのことが愛おしすぎて、我慢できない！
俺はお椀と箸を置き、目の前に座る彼女の目をしっかりと見つめる。緊張のため、顔が引きつっているのがわかるが、仕方がない。
そんな俺の態度に何かを感じたのか、コムギとコムギのムッタァも箸を置いて俺を見つめ返してくる。こんな緊張感は、W杯決勝でも味わえないだろう。
「コムギ、オリーは大切な話をします」
そう前置きをすると、コムギはかすかに首を傾げながらこくりと頷く。
こうなればもう、後には引けない。俺は昼間、チームの第一ＧＫであるイリエに聞いたセリフを、必死に頭に思い浮かべた。
彼曰く、日本で最もポピュラーなプロポーズの言葉らしい。
それさえ言えば絶対に伝わる！と、モトハシも自信を持って後押しをしてくれた。もしもそれで駄目だったらと、第二案まで考えてくれたキーパーチームにも感謝。しかし、緊張でそのふたつのセリフを正確に思い出すことができない。
まあ、あとは勢いでなんとか伝わるだろう！　大切なのは気持ちだ！
ごくり、と生唾を飲み、俺は覚悟を決めてその言葉をコムギに放った。

「毎日みそ汁で、オリーのパンツを洗ってほしい！」
「無理です！」

一世一代のプロポーズは、その日、なぜか失敗に終わった。
やはり日本語は難しい。機会を見てまた明日、今度はドイツ語で頑張ろうと、俺は決意を新たにしたのだった――。

独日友好条約！

「オリーとライオンジャー、どっちが素敵ですか？　どっちを愛していますか？」

俺の軽い嫉妬に、情熱的な抱擁で答えてくれたコムギ。その柔らかい感触に、俺の理性は一瞬にして吹き飛んだ。コムギが、照れ屋のコムギが、自分から、俺に！

気がついたら俺は思いきりその細い身体を抱き締めていた。恥ずかしさに逃れようとするそのささやかな抵抗が、なお俺の欲望を煽っていく。

『コムギ、俺の妻になってくれないか！？』

顔を真っ赤に染め、俺の腕の中でなおも恥ずかしがるコムギに、昨日言えなかったその言葉をささやく。やはり、母国語で話すのが一番伝わる気がするな。

俺のその懇願に、彼女は何度も何度も頷くと、くたりと力を抜いてこちらに身を預けてきた。心なしか上がっている吐息が、妙に色っぽい。

ああ、早く。早くこの奇蹟を俺だけのものにしてしまいたい！

コムギの了承は得られたのだから、あとはファータァとムッタァに報告をして、それから日本ではどういう順序を踏むのかを教わらないとな。

「Ａｎｄｅｒｅ　Ｌ？ｎｄｅｒ，　ａｎｄｅｒｅ　Ｓｉｔｔｅｎ．」、郷に入らば、郷に従えとはよく言ったものだ。

「おはよう、オリーちゃん。朝食食べていくわよね？」
「モルゲン！　ムッタァ、恐(おそ)れます！」

ひとときの熱い抱擁の後、照れたのか荒い息をしてぐったりとしてしまったコムギを残し、俺は一足先にキッチンへと足を運んだ。
もちろん、朝食を用意してくれているムッタァに、機を見て婚約の相談をするためだ。
やはり、これに関しては女親のほうがいいのだろう。
てきぱきとチーズオムレツやコーンスープなどを並べていくムッタァを、それとなく手伝う。といっても、俺ができることといえば、出来たての料理をダイニングに並べていくくらいだが。

「オリーちゃんのところでは、朝はどんなものを食べるのかしら」
「ドイチュでは、朝と夜は冷たいです。温かいは、お昼。お腹空いた時、午前中にちょっと食べるますよ」
「あらあ。じゃあ、こういうのは嫌い？」

ほかほかと美味しそうな湯気をたてるオムレツを指さし、ムッタァは眉尻を下げる。それを見た俺は、慌てて首を振った。

「ムッタァの料理、レッカー！　おいしい！」
「そう？　ならよかったわあ。これが鈴木家のスタイルなの。だから、麦子と結婚したらこういう朝食になると思うのよねえ」

にっこりと、俺を見上げてコムギによく似た笑顔を見せたムッタァは、ちらりと居間のほうを見ながらひそひそと続ける。

「麦子の指のサイズは、七号よ！」
「ムッタァ……！」
「日本では婚約指輪を贈るのが、そこそこポピュラーなやり方なの。

オリー、頑張るのよっ」

何も言わずとも理解してくれているムッタァに、俺は感激のあまり少しだけ涙ぐんでしまった。これで、ムッタァの了解はとれたも同然！

ファータァにはおいおい挨拶に来るとして、まずは指輪だな！

そう決意を新たにした俺は朝食をとってから家に帰ると、そのまま即行宝石店へと駆け込むこととなった。

＊＊＊

「で、さっそく指輪を注文してきたって、そういうことか？」

「です！」

俺のプロポーズ大作戦に協力してくれたお礼に、キーパーたちにはみっちりとしたトレーニングを、モトハシには居酒屋での食事を贈る。

今日のトレーニングにイリエたちは、途中から涙を流して喜んでくれていた。指導する俺も、とても嬉しい。明日からずっとこんな感じでいこうかと思っていたら、モトハシに慌てて止められてしまったのだが、なんでだろう？

俺は頼んだビールピッチャーを傾けながら、それをなぜか唖然とした表情で見守るモトハシに頷いてみせた。

『すぐにでも欲しかったんだが、こういうのは焦っても良いことはないからな。せっかくなので、俺とコムギが会った日付も一緒に彫ってもらうことにした』

『ああ、うん。おまえから“焦っても仕方ない”みたいな言葉が聞

けるとは思わなかったんだけどその前にちょっといいか』

モトハシの真剣な顔に、俺も手にしていたピッチャーをテーブルの上に置いて向き直る。もしかしたら、婚約指輪についてなにか助言があるのだろうか。

まさか、日本では指輪は一緒に選ばなければならなかったのか！？だったら、もうひとつ購入することも検討しよう。いや、むしろ何個でもコムギと一緒に指輪を選んでみたい。

彼女の喜ぶ顔を想像して笑顔を浮かべる俺に、モトハシは呆れたように口を開いた。

『オリー、悪いんだけどビールのピッチャーってのは、ひとり分じゃないんだぜ？』

『何を馬鹿なことを。モトハシ、このピッチャーというのはどこからどう見ても、ひとり分だ。日本ではひとりワンピッチャーだろう？　安心しろ、もうひとつちゃんと頼んである』

『ものすごく遠慮したい、その飲み方！』

まったくモトハシは……というか、日本人というものは慎み深い人たちだ。こちらの奢りなのだから、遠慮せずともいいんだが。

タイミングよく店員が持ってきたピッチャーを受け取り、俺はモトハシを安心させるように微笑んだ。

『俺とお前の仲だ。遠慮はするな』

「命の危険を感じる仲だな……」

ぼそりと日本語で何かを呟くと、モトハシは急にテンションを上げてピッチャー同士をごつんとぶつけた。

『もういいっ、とにかくオリー、おめでとう！』

『ありがとうモトハシ！』

そのまま一気に半分ほどあけてしまう。これぞ、男同士の語り合いに必要なもの。

最初、日本のビールはなぜこんなに冷えているのだろうかと不満だったが、今やこの冷たさが逆にいい。

頼んだヴルストやエダマメをつまみながら、ピッチャー三杯目になった辺り。とろんとした目のモトハシは、なんだか楽しそうに左右に揺れながら、ぼしっと目の前の机を叩いた。

「オリー、とにかくなあ、しーずーかーにぃなんだぞおっ」

「しーずーかーにぃ？」

「そうだっ。相手はぁ、一般人なんだからなっ。あんまし騒がしくしちゃあ駄目だ！　できるだけスマートに、静かに事を運ぶのが鉄則だっ！」

確かに、一理ある。

コムギはそんなに騒がしいことが好きではないみたいだし、ここはモトハシの言うように『静かに』行動したほうがいいのだろう。

さすがモトハシ。いい助言だ！

「モトハシ、オリー、“静かに”行動しますよ！」

「それでよしっ」

再びプローストと声を上げ、俺たち二人はピッチャーを空にする。

そしてその後、なぜかたったのピッチャー四杯でふらふらになったモトハシを、俺が家まで送っていくこととなった。あれだけで酔ってしまうとは、モトハシはよっぽど疲れていたに違いない。

それでも俺のために時間を作ってくれた彼に感謝して、俺は飲み足りなさにもう一軒、居酒屋へと足を向けた。

そしてそれからひと月後。指輪を受け取った俺は、静かに行動を開始した。
コムギのムッタァから聞いた住所を便りに、彼女の勤める会社に向かう。途中、やはりこれは外せないだろうと、花屋で真っ赤な薔薇の花束を購入し、俺はひたすら静かにひと言も話さずに、その扉を開けた。

「いらっしゃいま、せ……！？」

受付カウンターのような席についていたコムギが、入ってきた俺の姿を目にとめて言葉を失う。
この日のために新調したスーツだったが、気に入らなかったのだろうか。俺は密かにそんなことを心配しつつ、けれどここまで来て逃げることは許されないと決意を新たに彼女へと歩み寄った。
コムギが立ち尽くしているのを見て、隣に座っていた同僚らしき女性もこちらに向き直り、そしてそのままあんぐりと口を開けて固まる。同じように、そのフロアにいるすべての人々が俺に注目していた。
俺はそれにかまわず、足音すら立てないよう、静かに静かに彼女に近づく。そして、あと数歩のところで立ち止まると、おもむろに片膝をつき、指輪の入った箱を開け花束とともに、コムギに差し出した。
言葉はなくとも、俺の気持ちはきっと彼女に伝わる！
そう信じて、俺はモトハシの助言通り、ただひたすら無言で“静かに”コムギに求婚したのだった――。

プロポーズ大作戦　1

君に夢中なんだ。
そうささやくと、腕の囲いから手を伸ばしたコムギが真っ赤な顔で、ぎゅっと俺の頬をつねり上げた。
ひどく甘いその痛みに、自分の顔がとんでもなく緩んでいくのがわかる。彼女はなぜこんなに可愛らしいんだろうか。そんな気持ちを抑えきれずに、もう一度唇を寄せた俺に、コムギはゆっくりと目を閉じた。
ハレルヤ！

あの時、絶対に彼女は俺を好いてくれていると思っていた。
だがしかし、モトハシの助言通りプロポーズをした俺に、コムギは「絶交」を言い渡した。
ぽかんとしている彼女の右手に指輪をはめる俺に、その場にいた誰もが惜しみない祝福を贈ってくれたというのに。
きっと、突然のことだったからだろう。最初、俺の行動に真っ赤になったコムギは、次に周りのその反応を見て、今度はその顔を真っ青に変えた。そして、心配してその頭を撫でる俺の手を振り払い早口で何かをまくし立てると、さっさと俺を会社から追い払った。
やはり、静かすぎたのだろうか。帰り道、さきぼとの彼女の言葉を思い返して、自主反省会。
それとも、持っていった指輪が気に入らなかった？　薔薇の本数が足りなかったとか？

なぜかはわからないが、何となくまた失敗してしまったことだけを理解した俺は、そのままひとり寂しく家へと帰ったのだった。コムギの家へと。

「あらあ、どうしたのオリーちゃん。しょんぼりして」
「ムッタァ……」
「入って入って。今日はいいホッケが手に入ったのよ！」

にこにこしながらそう促すムッティに逆らわず、俺はうなだれたまま家の中へとお邪魔した。もうすでに、ここは第二のマイホームである。

成人して間もなく両親を失った俺にとって、コムギのムッタァやこの家は、夢に描いた温かい家庭の姿だった。

「はい、ココア。外は寒かったでしょう？」

そう言って手渡されたカップの温もりに、俺の涙腺はみるみるうちに崩壊した。

ココアを手にしてしくしくと泣く俺は、端から見たら情けないことこの上なかっただろう。この姿をかつてのチームメイトが見たら、神に祈りを捧げるかもしれない。世界に終わりが来ないようにと。

しかしムッタァはただ優しく俺の頭を撫でてくれた。

「ムッタァ、オリー、コムギに駄目って言われたです」
「いやねえ、あの子ったら。照れてるのよ、それは。昔からちょっと意地っ張りなのよね、麦子ってば」

ぽんぽんと自信をなくして丸まった俺の背を、宥めるようにムッティが叩く。そうして、手にしたままのココアを「冷めちゃうわよ」と勧めてくれた。

それに逆らわず一口飲めば、悲しい心の中に染みるように穏やかな甘さが広がる。少し、気持ちが落ち着いたのが自分でもわかった。
そんな気持ちが伝わったのか、ムッタァはにっこりと笑う。

「大丈夫よ、オリーちゃん。麦子だって今頃言い過ぎたなあ、なんて落ち込んでる頃だから。一所懸命ちゃんと説明すれば、気持ちだって伝わるわ。オリーちゃんが諦めないかぎり、ねっ」
「Ｊａ、ダンケシェーン、ムッタァ」

ようやく顔を上げムッタァを見て笑顔をになった時、玄関から恋い焦がれてやまないコムギの帰宅を告げる声が聞こえてきた。
俺は慌ててカップをダイニングテーブルに置くと、ムッタァに大きく頷いて見せ、急いでコムギのところへとむかう。そうだ、もう一度だけでもきちんと話そう。
俺がどんなにコムギを愛おしいと思っているのか、そばにいてほしいと思っているのか、それだけでも伝えたいんだ。

「コムギ！」
「どわあっ、おっ、オリー！？」

ひどく疲れたようなコムギの姿にたまらずぎゅっと抱きつけば、彼女は拒絶するでもなくそれを受け入れてくれた。
むしろ、恐る恐るではあるが俺の腰に手を回し、優しい手つきでさすってくれる。
その彼女の行動に俺は嬉しくなって、少し身をかがめると頬をコムギの頭へと擦りつけた。

「痛い痛い痛いっ、痛いってば、オリー！」
「コムギ、オリーは話がしたいです！」
「わかった、わかったから、ちょっと離れてっ。首がもげるって！」

ばしばしと背を叩くコムギに、俺は名残惜しくもゆっくりと身体を離す。そしてコムギを見ると、彼女は頬を赤く染めたまま、二階の自分の部屋を指さした。

「とにかく、私も今日のこととか訊きたいことあるし。私の部屋に行こう」

「Ｊａ！」

どこか怒ったように、ぶっきらぼうに告げられた言葉に俺は同意して、階段を上がるコムギのあとに続く。

コムギの部屋……それは、この前初めて深い深いキスをした思い出の場所でもある。どうか、最後まで理性が保ちますように、と気合いを入れて俺は神に祈った。

部屋に入るとコムギは鞄を降ろし、小さな丸いテーブル近くへと腰を下ろす。「座って」と俺も促され、大人しくコムギを抱えて座ろうとして、叩かれた。

「そうじゃなくて！　オリーはそっち！　私の前に座るの！」

「えー」

「えーじゃないっ！」

思わず不満の声を上げた俺に声を荒げたコムギは、それでも大人しく指示に従った俺を見て、再び真面目な顔へと戻る。

腕を組んでこちらを睨む彼女は、可愛い。座っていても体格差によって、少しこちらを見上げるようになる黒い瞳が、俺の理性を試しているかのようだ。頑張れ、俺。

「それで、どういうこと？　これ、どういう意味？」

コムギがテーブルの上へと置いたのは、昼間俺が彼女に渡したエンゲージリングの箱だった。多分、指輪はその中にそのまま入れられているんだろう。
身につけてもらえていないことに軽くショックを受けながら、俺は気を取り直して彼女へと説明を始める。
俺はコムギの笑顔が欲しいのだ。ずっと傍にいて、笑っていて欲しいのだ。

「オリー、コムギに楽しくしてもらいたい。だから、ダチに相談しました。ダチ、オリーに“静かに”やりなさいって言った」

ムッタァの言ったとおり俺は一所懸命コムギに説明するが、なぜか彼女の顔はだんだん曇っていく。どうしたことだろうか。

「静かにやるって、どういうこと？」

いつもと違って固く感じるその声に、俺は少し焦る。
どう言えば彼女はわかってくれるんだろう。できれば、ちゃんと彼女の国の言葉で、日本語で伝えたい。
コムギに喜んでもらいたくて、サプライズのプロポーズをしたのだと。サプライズ……サプライズ……これは日本語でなんて言うんだ？　ええと、確か……。

「ドッキリです！」

そう、多分この単語で合っているはず。
そう自信満々に答えた俺に、コムギは見る見るうちに顔を強張らせた。なぜだ？

「ドッキリ、って……」

「オリー、コムギ笑わせたい。だから、静かにこっそりドッキリしました。コムギ、楽しい？　コムギ、笑える？」

俯いてしまったコムギの顔を覗き込むように、そう俺は言葉を重ねる。

俺のこの気持ちはコムギに伝わったのだろうか。彼女の笑顔を、答えを知りたくて近づいた俺に、コムギはがばっと顔を上げると突然大きく腕を振りかぶって、そして。

「さいっていっ！　大っ嫌い！　出て行ってよ、オリーのばかあっ！」

叩かれた頬の熱さに呆然とする俺を無理矢理部屋の外へと追いやり、コムギは泣きながら部屋へと閉じこもってしまった。

俺はわけもわからず部屋の前に立ち尽くし、何度もコムギに声をかける。

しかし返ってくるのは沈黙ばかりで、仕方なく、俺は張り裂けそうな胸を抱えてムッタァのもとへと戻った。

ムッタァは俺の顔を見て何かを理解し、心配いらないと言ってくれたが、俺はその言葉に首を振ってコムギの家をあとにする。

嫌われてしまった、その事実だけがひどく重く俺の心にのしかかっていた。

プロポーズ大作戦　2

（さいっていっ！　大っ嫌い！　出て行ってよ、オリーのばかあっ！）

愛しいコムギにそう拒絶されてから二週間あまり。俺は彼女とまったく顔を合わせることはなかった。

なにしろコムギは徹底的に俺を避けていたし、俺は俺でリーグが終盤戦ということで地味に忙しく、アウェイやなにやらも重なり、なかなかまとまった時間がとれない。

それに加えて、断り切れなかった取材を受けていたりしたら、あっという間にそれだけの時間が経ってしまっていたのだ。

俺は焦る。

もうコムギは俺のことなんか忘れてしまったんじゃないのだろうか。

もしかして、落ち込んだ彼女を誰か他の男が慰めていたりするんじゃないだろうか。

そんなことばかりが頭の中をぐるぐると回り、ついに俺はお気に入りのテディベアを抱いても眠れなくなってしまっていた。

『オリー、今日はいいから早く帰って休めって』

目の下に隈をつくった俺にモトハシが声をかける。

俺が黙って首を振るとその背後から、いつかのスタッフがひょっこり顔を覗かせた。前に俺を怖がっていたその女性は、緊張したような面持ちでこちらになにかを差し出した。

そして意を決したように口を開く。

「あのっ、お疲れだって聞いて……その、この栄養ドリンクけっこう効くんです！」

見ればその手に握られていたのは、金色のラベルの栄養剤。

言い切って少し笑みを浮かべた彼女の手から、俺は驚きを隠せないままそれを受け取った。怖がられているとばかり思っていたんだが。

きょとんとしたその顔がよっぽど面白かったのか、モトハシが笑いながら俺の肩を叩いた。

『だから言っただろう。時が経てばわかってもらえるって』

その言葉に、改めて目の前でこちらを見上げるスタッフを見る。彼女は緊張していて、けれども俺と目が合うとにっこりと笑ってくれた。

最初に会ったときには、こちらを見るのも怖がっていたのに。

ドリンクを受け取ったまま無言でいる俺の脇を、モトハシが肘でつついた。ぱちり、と器用に片目をつむって見せ、俺に何かを促す。そうか。

「ダンケシェーン！　オリー、ちょう頑張りますよ！」

できるだけ優しそうに見えるように微笑むと、スタッフはとても嬉しそうに笑顔を返してくれた。そして勢いよく頭を下げると、スタッフルームへと戻っていく。

その姿に俺は、ここしばらくのみんなのことを思い出した。

めっきり食欲の減退している俺を、ご飯を食べに行こうと誘ってくれたキーパーたち。来日してからの疲れが出てきたんじゃないか

と心配して、休みを調整してくれたフロント。いつも何かと声をかけてくれるモトハシ。他の選手たちもみな、最近は覚え立てのドイツ語で話しかけてくれていた。

そしてこの栄養剤。

不覚にも俺は泣き出しそうな心地になって、ぐっと奥歯を噛み締めた。

そうだ。諦めなければ、伝えようと努力すれば、きっと気持ちは伝わるんだ。

俺はコムギに対して自分を押しつけるばかりで、きちんと彼女の気持ちを考えていただろうか。わかってほしいと言うばかりで、彼女の言葉を訊こうとしただろうか。

『元気が戻ってきたみたいだな、オリー』

『モトハシ！』

『俺の知ってるビルケンシュトックは、一回の失敗くらいじゃ諦めない奴だったと思うけどなあ？』

いつもの彼の笑みに、俺は大きく頷いてみせる。

大事な試合でミスしたときもあったし、あと少しのところで力及ばず優勝を逃したこともあった。けれど俺は絶対に諦めなかったから、今こうしてここにいるんだ。

『ということではい、これチケット。ホーム最終戦のやつ。これ持って会いに行ってこいよ』

「モトハシ……！　オリーはモトハシが大好きですよ！」

「なんでそういうとこだけ日本語になるんだあああっ」

叫ぶモトハシをぐっと抱き締め感謝の意を表すと、俺はありがたくそれを受け取り、彼が勧めてくれたようにそのまま早めにグラウンドをあとにした。

コムギにこの気持ちをわかってもらえるまで、コムギの気持ちを聞かせてもらえるまで、絶対に踏ん張ってみようと心に誓って――。

＊＊＊

ところが、である。

コムギの帰宅を、彼女の家の前で――今日はムッタァが留守であったため――待っていた俺の目に入ってきたのは、抱き合うようにして歩いてきた男女の姿。

薄暗い街灯の明かりに照れされたその顔は、間違いなく俺の愛するコムギ。そして、その身体に手を回して歩いてくるのは、俺の見知らぬ男。

それを見た瞬間、体中の血液が沸騰したような、反対に凍り付いたような。そんな強く複雑な想いが駆けめぐり、俺は無意識にその二人に向かって駆け出していた。

「コムギ！」

ありったけの大声を出して近づくと、名を呼ばれたコムギよりも先に、男のほうがびくりと肩を揺らしてこちらを見た。

一見すると真面目そうな若い男。そいつはなぜかぐったりとしているコムギの腰に手を回し、その身体を支えている。俺は威嚇するようにそいつを睨み付けた。

「コムギ、どうしたですか！　あなたは悪いことをしてますか！」

「えっ、あの、俺……」

「Ｓｃｈｅｉｓｓｅ！」

吐き捨てるようにそう言って、俺は強引に男からコムギの身体をかっさらう。
その小さくて華奢な身体をそっと持ち上げると、俺は再び目の前の男を射殺す勢いで睨んだ。男はその俺の顔をまじまじと見つめ、それからなぜか満面の笑みを浮かべる。

「ビルケンシュトックさん！？　オリヴァー・ビルケンシュトックさんですよね！」
「……Ｊａ」
「すっごい！　本物！　俺、ドイツ代表のファンで、ビルケンさんのことすっごい尊敬してました！　チャンピオンズリーグのＰＫの時とか、マジ神がかってて……やっぱい、俺本物に会っちゃったよ！」

なんだか変な方向に行っている気がする。
男のあまりに無邪気な様子に、俺は入っていた肩の力が抜けていくのがわかった。どうやら、俺が考えていたようなことではないらしい。
抱え上げられ、俺の胸に寄りかかったコムギが低く唸る。それに気がついた男が、あっと声を上げて口を開いた。

「今日、会社で早めの忘年会だったんですけど、なんか鈴木さんすっごくペース早くて、潰れちゃったんですよ。普段はこんなことないんですけど……。それで俺が同じ方向だってことでここまで連れてきて……あっ、変なこととか下心とかまったくないですから！俺、ちゃんと彼女いるし！」

ころころと変わる表情に完全に毒気を抜かれた俺は、わかったというように頷いてみせる。とりあえずこいつは悪い奴ではないらしい。

「ダンケシェーン、あー……」
「木村です！」
「ダンケ、キムラ。コムギ、オリーが持って帰ります」

ぺこりと日本風に頭を下げると、キムラはひどく恐縮してしまった。そこでモトハシからもらったチケットが二枚あることを思いだした俺は、お礼にとそれを彼に渡す。すると、キムラは目をきらきら輝かせて喜び、「必ず彼女と見に行きますっ」と宣言し、来た道を戻っていった。

サッカーを愛する人間に悪い奴はいない。

俺はひとつ大きく頷くと、気持ちよさそうに眠ったままのコムギを抱え直し、家へと歩みを進めた。まあ、とりあえず俺のうちに運んで寝かしつけよう。

寝室のテディベアに囲まれ眠るコムギを想像し、俺はちょっとだけ湧いた下心を神に懺悔した。

プロポーズ大作戦　3

すやすやと、俺のベットでティディベアに囲まれ眠るコムギ。
そのあまりの可愛らしさに焼き切れそうな理性をなんとか押しとどめ、俺は「これくらいなら……」と思いつつ、携帯電話でその寝顔を写し取ったりした。ここまでなら、まだカードは黄色のはず。
そして、ゆっくりと髪に手を滑らせ、そのなめらかな感触を楽しんでいるうちに、いつの間にかうとうとしてしまっていたらしい。

「オリー、オリーってば！」

ぺちぺちと小さな手に頬を叩かれ、俺は深い眠りの中から意識を浮かび上がらせる。ゆっくりと目を開くと、目の前には天使。
ベットサイドの小さな明かりに照らされて、真っ直ぐな黒髪が濡れたように光っている。それと同色の瞳は、どこか気まずそうに俺を見つめ、小さな唇から俺の名前がこぼれた。

「オリー、起きて！」
「コムギ……？」

ベットの隅にうつぶせになっている俺の頭に、コムギの華奢な指がそっと触れた。あまり上等とはいえないだろうごわついた髪を、さっき俺がそうしていたように、ゆっくりとすいてくれる。
ここはなんていう天国なんだろうか。
俺がそんなことを考えながら、また瞳を閉じようとすると、その手が頬をぎゅっとつまむ。痛い。……痛い？
そこでようやくはっきりとした意識が戻る。

がばりと身を起こした俺は、今し方つねられた頬に手をあて、ベットの上にちょこんと座るコムギを見た。

「ようやく起きた！　ずっと呼んでるのに、全然反応ないんだもん。黙って帰るに帰れないし」

少し拗ねたような言い方に、俺は胸がぎゅっと掴まれたような感覚を覚える。この目の前の可愛らしい人は、もう俺と目も合わせてくれないんじゃないかと、そう絶望していたのに。

そうして俺が恐る恐る伸ばした手を、コムギは拒絶することなくじっと見つめる。

そうっと触れた頬は、アルコールの余韻が残って少しだけ熱い。頬を親指で撫でれば、コムギはくすぐったそうに身をすくめた。そして、両手でそっと俺のその手を包み込む。

「コムギ……コムギ、ごめんなさい。ごめんなさい、だから聞いて欲しい」

「オリー？」

頬から手を外し、包んでくれていたその手を改めて握り直して、俺はもう一度自分の気持ちを伝えることから始める。

何回でも、何回でも。つたない日本語でも、わかってもらえるまで。

「オリーは、コムギの笑顔が好き。天使みたい。コムギが笑うと、オリーの胸がとってもあったかい。だから、オリーはずっとずっとコムギに笑顔してほしい」

どこに恋したのか、なんで彼女だったのか。

一目惚れなんて本当に存在するのか……そんなこと、本当にどう

でもいいくらいにコムギが好きだ。
この出逢いのために全部の運を使い果たしたんだって言われても、ちっとも惜しくなんかない。むしろ、それ以上のものをもうもらった気分でいる。
俺の言葉に、戸惑ったように彼女の黒い瞳が揺れた。
「オリーの隣で、いてほしい。他の男性に笑うの、だめです。オリーはコムギを独占したい。だから、指輪買いました。コムギ、指輪嫌い？　オリーのこと……嫌い？」
「え……」
一番訊きたくて、一番訊きたくなかったことを告げると、コムギは大きな瞳をさらに大きく見開いた。握っている手が、少し震える。
その右手の指のどこにも、俺が贈った指輪はつけられていない。それがすべての答えのような気がして、俺は不覚にも泣きそうになってしまった。コムギの手から片手を外し、慌てて顔を覆い隠す。情けないことこの上ない。
そのままひどく落ち込んでいきそうになった俺の頬に、今度はコムギの手が触れた。ちょっと髭がそり残されたそこを、小さな手が撫でていく。
俺がびっくりして覆っていた手を外すと、真剣にこちらを見つめるコムギの瞳に囚われた。
「ねえ、ドッキリってどういう意味なの？」
問われた言葉の真意がわからず、俺は軽く首を傾げた。すると、むにっと再び頬をつままれる。少し痛いけど、嬉しい。
思わず緩んだ顔を見て、コムギは機嫌を損ねたように眉を寄せた。
「真剣に訊いてるのっ！　大事なことなんだからね！」

「Ａｕａ！　痛いですよ、コムギ！」

その声に限界まで引っ張られた頬をぱっと離して、コムギは不機嫌な表情のままで俺を睨む。腕組みをして、怒っているんだぞというアピールをするコムギは、やっぱり可愛い。

今、携帯を取りだしたら……駄目だろうな、やはり。

俺はじんじんする頬をさすりながら、さっきのコムギの問いに口を開いた。

「ドッキリは、コムギをびっくりさせる。びっくりするのは、喜ぶですね。オリーの日本語、間違ってますか？　サプライズ、ドッキリ言わない？」

「サプライズ……のことだったの？」

「Ｊａ」

逆に問い返されて頷けば、なぜかコムギは後ろに向かって倒れ込んでしまう。

まさか気分でも悪くなったのだろうか、とびっくりしてベットに上りその顔を覗き込めば、コムギは瞳を涙で潤ませていた。

泣いてる！　俺のせいか！？　そんなにプロポーズが嫌だったのか？

軽くパニックになる俺に気がつかず、コムギはぽろぽろと涙を流しながら俺を見る。

「馬鹿オリー！　そんなの、ドッキリって言わないよっ」

「コムギ、ごめんなさい。コムギ、怒った？　オリーのこと嫌い？」

「違うの！」

仰向けになっていたコムギがばりと起きあがり、覗き込むようにしていた俺の首に強く強く抱きついた。

突然の柔らかな感触に戸惑いつつ、それでも俺はその身体を壊さないようにそっと抱き締め返す。これは……どういうことだろうか。
肩に寄せられた頬から涙が流れていくのがわかって、俺はとりあえず宥めるようにその薄い背中を優しく撫でる。
すると、耳元で涙に濡れたコムギの声が聞こえてきた。

「ドッキリっていうのは、いたずらってことだよ、オリー。私ね、オリーにからかわれたんだって思ったから怒ったの。プロポーズされたと思ったのに、それがいたずらなんだよって言われたから、すごく悲しかったの」
「コムギ……違いますよ、コムギ。オリーはいたずらしてないよ！オリーはコムギにプロポーズしましたよ、本当のことですよ！」
「うん……」

うち明けられた言葉にびっくりして、俺はコムギの顔を見ようとその身体をゆっくり離す。
覗き込んだコムギの顔は涙に濡れて、けれど何だかとても嬉しそうに微笑んでいた。それは、俺が一番見たかった彼女の微笑み。
本物の、俺の天使。俺だけの。
何だかとても眩しく感じられて、俺は少し目を伏せ、そして吸い寄せられるようにその唇に自分のそれを近付ける。コムギは頬を染め、拒絶することなく俺を受け入れてくれた。
最初は軽く重ね、それから舌で可愛らしい下唇を舐めてやると、コムギはくすぐったそうに身をよじる。それがまたたまらなく愛おしくて、唇で唇を挟みこみ、その先を促した。
恥じらうように薄く開けられたそこに、深く、深く俺が入り込む。
直接的な感触を甘いと感じるのは、俺の頭がもういかれてしまっているからだろうか。
それでもこの腕に彼女がいて、こうして口付けができるのなら、もうそれでいい。

それ以上いけばもう戻れない、というぎりぎりのところで俺はなんとか踏みとどまり、コムギから唇を離した。
ひどく名残惜しくて、そのまま鼻や目元に口付けると、彼女はうっとりとした吐息を漏らす。俺の我慢は限界だったが、でもまだ肝心なことを彼女に訊いていない。
この先は、それからでも遅くはない！

「コムギ、オリーと結婚してくれますか？」

両手で小さな小さな顔を包み込み、そう真面目に問えば、コムギはその手に手を重ねにっこりと美しい笑みを俺にくれる。
軽く頷いて、さっきとは違う感情のこもった涙を流して。

「仕方がないから、オリーのパンツ、毎日みそ汁で洗ってあげるよ！」

その言葉に、俺は比喩ではなく本当に天にも昇る気持ちでコムギを抱き締めた。世界で一番の幸せを手にしたのは自分だと、今ならどこへ向かっても恥ずかしくなく宣言できる。
そうして俺はコムギと一緒に寝転がる。ここがベットの上だなんて、最高の奇蹟だ！
俺はコムギの額に軽くキスをすると、ベットサイドの明かりを落とす。
明日の朝、この天使を腕に抱いて目が覚ますことできるそのことを、神に感謝しながら――。

プロポーズ大作戦　3（後書き）

オリー編、これにて完結です。ありがとうございました。
この後、ちょっと時間をおくかもしれませんが、番外編を書いてみたいと思います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0649z/

ドイツさんと私

2011年12月11日02時09分発行